のことばをうけ、――八田宗吉や古川伊喜右衛門たちと手をにぎり喜び合った――これらの一つ一つが切れ切れな場面として、二人の胸に思い起こされました。

「あの日、私は、私の計算好きを笑いものにしていたたくさんの人からも、おほめのことばをもらった。小さいころから好きだった計算が、人々の役に立ってうれしかった。けれども、今考えてみると、あの仕事は、お前がかげで助けてくれたからできたのだと思う。あの日の手がらは、ほんとうはお前が作ってくれたのだ。ありがとう。」

ふだん遠出などしたことのないれんにとって、一日じゅう馬の背にゆられ、夕方のしぐれにあたり、夜ふけまで寝つかれなかったあの一日は、だいぶこたえたようでした。翌日、疲れの出たれんは病いにたおれてしまいました。

ひと冬を無事に越せれば、という医者のことばも空しく、安政三年二月のひときわ寒い日の夕方、れんは、